

「夢トンネル」

(小学館クリエイティブ、2013年発行)

法学部卒 長谷悠太

『夢トンネル』は1983年5月から1年間にわたり産業経済新聞社の日刊紙であるサンケイ新聞の朝刊に連載された④作品で、ジャンルで言えばファンタジーものになるだろうか。短編ではないので「おすすめの一話」ではなく「一作」であることをまず断っておく。

あらすじは以下のようなものだ。主人公は小学生のユメオくん、彼の住む一軒家にはユーカリの木が生えている。ユメオくんは時々ユーカリを眺めつつ家族の過去や自分の見た夢に思いを馳せていた。ある日バクコアラ（夢を食べる珍獣の獺から考え出されたであろう架空の動物）のウィ〜キ〜がやってきて、夢トンネルで昔へ連れて行ってあげようかと提案する。彼ら（同級生を伴うこともある）が行く先は（連載当時の）40年前つまり太平洋戦争の時期だったり、あるいはユメオくんのパパの少年時代であったりする。彼のパパは現代でも少年の心を決して失っていないが、かつては雑誌「漫画少年」に自作を投稿するなど熱心な少年（④先生たちの少年時代の面影がそこに見えるようである）で、パパはどの時代でもユメオくんに優しく接してくれる。40年前では自分たちと年齢の変わらない少年少女が戦争の時代を生きていることに心を動かされる。ノスタルジーを感じさせる過去と現代を行き来する中でユメオくんが得たもの・感じたものとは…。

この作品が描かれたのは1983～84年で、④先生が多くの作品・キャラクター（の基礎）を一通り発表した後、つまり④先生の自伝的傑作である『まんが道』や『少年時代』より後の作品である。私は『夢トンネル』を、このいずれの要素をも併せ持っているという点でお勧めしたいのである（言うまでもないが両作品も私は強く勧めたい）。『夢トンネル』は（④先生の少年期の）漫画に対する情熱や、戦争の悲惨さを一つの作品の中で伝えるだけではない。ユメオくんたちが夢トンネルを通り抜けた先で出会った少年たちはみな、どのような未来があるか分からなくとも確かに「今」を生きている一実に当たり前のことだが心に訴えかけてくるものがある。物語の終盤でクラスメートの博士くんはユメオくんに「人間はいつまでも夢をみて生きられない。夢はいつかはさめるものだから」と語るが、果たしてそうなのだろうか。ぜひこの作品を読んでそれに対するご自身の答えを見つけていただきたい。